

あま市民病院だより

★不定期連載 消化器コラム★

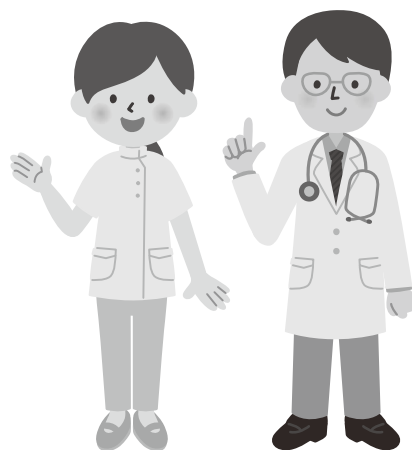
第9回 潰瘍性大腸炎

潰瘍性大腸炎は芸能人や政治家のなかでも病気を告白するひともおり、身近なひとのなかにも治療を受けている方がいらっしゃるかもしれません。

1875年にWilksとMoxonが重症な下痢をきたす疾患として『原因不明の非特異的大腸炎』として報告されたのが初めてだとされています。日本では1928年に初めて報告され、1975年に厚生省特定疾患に認定されました。注腸X線検査や大腸内視鏡検査で直腸から連続性びまん性に粘膜発赤や白苔をとともうびらんを認め、病理検査なども含め診断されます。病変の範囲によって、直腸炎型・左側結腸炎型・全結腸炎型に分類されます。まれに区域性大腸炎型も認めます。下痢や下血の回数や発熱、内視鏡所見などにより活動性が評価されます。約2/3の患者様は軽症のままですが、ときに重症化し入院して副腎皮質ステロイドや免疫抑制剤が必要となります。劇症型・中毒性巨大結腸症・下血がとまらないときは外科治療の対象となります。2010年には抗ヒトTNF α 抗体製剤が保険適応となりました。この頃は、顆粒球除去療法や白血球除去療法などの血液透析を応用した治療や、アザチオプリンやプログラフなどの免疫抑制剤の使用が可能になり治療の選択肢が時代とともに劇的に変化しておりました。現在もさまざまな免疫調整薬が登場しており、いくつもの研究がなされています。活動期の入院期間も短くなり、生活の質も改善しつつあると実感しています。患者様の中には、なぜ定期的に内視鏡検査をするのであろうかとの疑問もあるかと思えます。内視鏡検査の結果が治療法に必要なのと、発症から10年で発がん率約1.6%と高いことなどがおもな理由になります。

さて、私自身が担当した患者様には潰瘍性大腸炎合併妊娠の方もおられました。無事に出産にこぎつけるまで婦人科の先生と協力して診療にあたりました。下痢や下血により日常生活に支障はあるものの、その患者様が、新たに家族をもつことができたことが自分のことのように嬉しく感じました。若い患者様に接するときには、そのときの経験を病状説明時に付け加えています。今回は、慢性下痢や下血、腹痛をきたす潰瘍性大腸炎という病気についてのお話でした。

あま市民病院 消化器・内視鏡センター長 いわた まさみ 岩田 正己



公益社団法人
地域医療振興協会

あま市民病院

～市民と連携機関に信頼され、健康と安心を提供する病院～

〒490-1111 あま市甚目寺畦田1番地

問合時間：午前8時30分～午後5時

(土・日曜、祝日を除く)

☎ 444・0050 FAX 444・0064

<https://www.amahosp.jp/>



◆◆◆あま市民病院Facebookのご紹介◆◆◆

あま市民病院の活動やお知らせなどをFacebookでも発信しています。



<https://www.facebook.com/amahosp/>